川柳雑誌

★兵士は戰線に！　我等は銃後に!!（國民精神總動員）

麻生路郎★編輯

大正十三年三月三日第三種郵便物認可
昭和十三年六月十五日發行
第十五卷第五號（毎月一回十五日發行）

13/6

173

第十五卷　第六號
毎月十五日發行

川柳雑誌社發行

アサヒビール

大日本麦酒株式會社

君と僕
そして
ビールと
櫻ン坊

路郎

大阪　午後五時發
神戸　同六時四〇發
和歌浦　同九時四〇發
（一日で那智、ドロ遊覽　翌早朝歸着）

安産のために

姙娠としての大切な責任はカルシュームを補給して諸病を防ぎ、子宮の收縮を容易ならしめ「安産」へ導くことにあります。

ワダカルシューム錠

大阪道修町　和田卯助商店

片瀬醫學博士述「安産のために」冊子呈上

樹林醫學博士　推奬
片瀬醫學博士　監査

川柳雜誌

第十五卷　第六號

川柳雜誌　一七三號　目次

表紙……柴谷宰二郎

川柳街雜筆……（六）
活火山の偉觀……鳥山一歩…（六）
大乘川柳……長野文庫…（六）
父炭車を懷ふ……畑田よし江…（六）
的確な照準……山本葉光…（七）
川柳評釋百句……麻生路郎…（六）
川柳相撲漫談……森東魚…（一〇）
古川柳研究「尻馬」……石崎柳石…（一〇）
武玉川三篇研究（十八）……梅本秋農　森東魚…（二）　蛭子省二
詩人複眼……高鷲亞鈍…（一一）
○○漫畫だより……北みきを…（一）
川雜案内……（九）　懸賞川柳を募る……（一六）
不朽洞句抄……麻生路郎…（一）
近作柳樽……麻生路郎選…（四）
川柳塔……諸家…（八）
一路集……雨……西田艸樂選…（一二）
演說……宮岡白峯選…（一三）
各地柳壇……（一四）
飛燕往來……諸家…（一三）
後記…（表三）……社關係の人々…（表三）
川・協・の・頁
久良伎翁　古稀祝賀記念品贈呈に就て……（一三）
川・協……（一三）
柳人素描……（一三）
（三七）越智伽藍堂君　（三八）加藤ライト君
柳界展望……（八）

不朽洞句抄

麻生路郎

銃後々々
丙種の意氣も知つてくれ

放送に
涙も音になつてゆく

言ひ譯の多辯を消した電車路

○○漫畫だより

★北みきを

出發の際はいろ〳〵お世話に相成り厚く御禮申し上げます。今日で三日、とても元氣で朗らかにハリキツテるますから何卒御安心下さい。いろ〳〵愉快な事が澤山あります。ボチ〳〵お報らせ致します。

（一）食器洗ひ場

大きな戴鉢がズラリと並んで我々の家庭の台所の如きチヤチナものではありません。

（二）軍隊チヤビン

このチヤビンは軍隊チヤビンと申しましてネ、とてもでつかいです。でもたちまちからつぼになるのですからすごい元氣でハリキツタ兵隊さん揃ひです。僕も元氣ですから御安心下さい

（三）試膽會

五月三日の夜。試膽會がありました。暗夜に兵舍の前の山の中へ一人づゝ出かけて行くのです。山の中には墓場があつて物凄い事限りなしです。

でも流石帝國軍人です。一人も腰を拔かすものもありませんでした。軍隊生活はとてもほがらかですよ。

（四）五人拔

五月七日体操の時間に久し振りで相撲をとり漫人力の漫腕を發揮して五人拔きをしました。まだ小生の體力衰へず、この調子で益々ハリキルつもりです。麥飯も近頃では仲々うまくなつたでアリマス。

川柳雜誌社の發展を祈ります。

武玉川三編研究（十八）

梅本秋の屋
森東魚
蛭子省二

(271) **暮六ツまへに大またな武士**

省二＝「夜六ッ時より御太鼓にて大扉メ明六ッ時より開之、夜九ッ時より潛扉メ、曉七ッ半より小扉開」――悠然と構へて歩るくべき武士が、大股で大急きで、門限に歸りつかねばならぬのだ。――同工作に『どん〳〵で女の駈ける一ッ橋』

秋の屋＝六ッ時の御太鼓といふのは、江戸城の櫓の太鼓であるが、この句は大名邸へ歸る武士が、門限に迫つたので、大いに急ぐとである。

東魚＝まさか駈け出しも出來ない（愈々遲刻すれば致方ないが）相當な資格の武士の樣子が思はれる。

(272) **乳母乘て動かぬ池の捨小ふね**

省二＝この乳母は巨人ならむ。又、乳母の棹では一寸動かぬ。

秋の屋＝躰重二十餘貫目で、動かざること山の如し。

東魚＝「乳母乘つて」は調子が悪い。乳母の巨體故とすると、句は聊かくすぐりに墮ちる。

(273) **七曜へ吐く船頭の息**

秋の屋＝「七曜」は北斗七星のことで、遠洋を渡航する船頭が、この星を仰いで息を吐くのである。

東魚＝「七曜へ吐く」で、遮るものなき海の只中にある感がうけとれる。

省二＝決心の程も窺へる息。

(274) **針箱へ額か付とかんこ鳥**

秋の屋＝婦人が裁縫をするとて、針箱に向ふ時、一生懸命になつて物も言はずに、森閑となつてゐる態は、閑古鳥でも啼きさうだ、と云ふのであらう。

東魚＝縫ひ疲れてうたゝ寢をするのではないか。ひつそりとなる趣を閑子鳥とやつたのであらう。

省二＝うたゝ寢と思ふ。針箱へ額を付けたまゝで、そこに感じを出した作。

(275) **常念佛聲か替れは近くなり**

秋の屋＝常念佛を勤めて居る老僧が、此頃はその音聲が衰へて來たが、漸く死期に近づいたらしい、といふのであると思ふ。

東魚＝距離が近くなつた事のやうに思つてゐた。近づくと遠くで聞いたのと、聲の調子が違ふと云ふのではないかと思ふ。

省二＝常念佛堂へ段々近づいた事であらう。

秋の屋＝私はなほ前說を棄てかねる。

(276) **隱す事なくて女房の老にけり**

省二＝女は三十ともなり、四十に近くなると、お化粧もしなくなつたり、年齡も隱すところなく言つたりして、兎角地味になり年々歲々ひどく老ひゆき勝ちとなる。

秋の屋＝夫や子供等に對して、何事も打明けて、秘密が無くなるやうでは、色香の失せた老女房に相違ない。

東魚＝穿つた句である。

(277) **物悅びのよこれもの着す**

省二＝悅びに浸つて居る者は、汚れ物などは着ずに、さつぱりした整つた風采をする。また以て心のすが〳〵しさに添ひ得る。

秋の屋＝平凡至極で、何も興味も無い句だ。

東魚＝全く埒もない句である、或は別に味ひがあるのかも知れない。

(278) **妾の尼の言しらけ也**

省二＝「言白」は談話中に座を白らけさせてしまふ。話が中途で興がなくなつて止めてしまふ。言ひ爭ふ氣味あり。妾の尼には、さういふ場合も度々なのであらう。

秋の屋＝「妾の尼」とは、妾の主公に死別して、菩提を弔ふ爲に尼になつたの歟。句意がよく判明しない。

東魚＝尼を妾に持つてゐるのであらう。妾も尼さんとは、お座のさめた話だといふ意ならんか。

(279) **灸のすへ人を持たぬ墨染**

省二＝獨身であるからならむ。

秋の屋＝世捨人の獨居であるから、脊中に灸を据ゑる事も出來ぬのである。

東魚＝灸をすゑてくれる對手もない、要するにつれさう女房もないと、侘びた生活を現はしたのみであらう。

(280) **宮はらの恥もおもへは一周忌**

省　二＝(204)『勘當された一周忌くる』の、一周忌と同用法であらう。さすれば、これも洒落氣分が含む。

秋の屋＝前の勘當の一周忌と、同工異曲であるが、内容はこの方がやゝ複雜である。

東　魚＝恥をかいた一年目だと云ふだけと思ふ。

(281) **縄代に夕部ころんた下駄か浮**

省　二＝夕べ苗代の畔を通行して轉んだ時の下駄が、浮いて居るといふ、何んとなく不似合な事柄に、面白さを覺えた作。

秋の屋＝細い畔路の夜行であるから、轉倒する事もあらうが、苗代水に下駄の浮ぶは、輕妙であると思ふ。

東　魚＝誰かいうべ、此處で轉んだなと云ふ心持ち。

(282) **幾度か聞く何かしの寺**

省　二＝「聞く」は尋ねるの意ではなからうか「何にがしの寺」と幾度も尋ねる。――前句が欲しい。

秋の屋＝「何がし寺」とばかりでは、高野山に今道心を尋ねるやうなものだ。

東　魚＝寺町には、同じやうな名や表に附きの寺がいくらもあるので、使ひにでも行く者が、何々寺ですねと、何度も念を押すと云ふのであらう。

(283) **上戸のぶんは殘る子の刻**

省　二＝子の刻は夜の十二時。上戸は夜明しであらう。――この「殘る」のとり方により場合も異なつてくる。例へば『亥の刻と子の刻町はたゝきこみ』に適用してみれば、吉原の句ともなると思ふ。

秋の屋＝病人の夜伽とも、死者の通夜とも解釋される。

東　魚＝全く色々の場合にとれる。前句がほしい。

(284) **絲細工人の氣を置く當麻寺**

省　二＝「氣を置く」は氣兼ねをする。而も單に氣兼する丈けでなく、留意もする謂『呉服屋にないのを拜む當麻寺』『蓮の糸たなびく雲の當麻寺』大和當麻寺には、中將姫の織つた一丈五尺の、蓮の糸製の曼荼羅がある。

秋の屋＝氣兼ではなくて、留意する方である。

東　魚＝當麻寺には、立派な糸細工、蓮の曼荼羅がある、こゝで滅多に糸細工の自慢話などは出來ぬ事だと「氣兼ね」の方に考へる。

(285) **春の野や飯粒をふむ山かつら**

省　二＝曉の山端に雲が懸つてゐた。春の野を歩いてゐたら、昨日何人かが喰ひ棄てた辨當の餘り飯を踏むだ。これも春の野の感興の一つであらう。

秋の屋＝春の野、山かづら、飯粒、句意が散漫で捉へどころが無い。

東　魚＝朝早く野に出たら、昨日の野遊びの人々の捨てた飯を、踏んだと云ふ意に解してゐた。昨日の賑さを連想して、逆に朝の春の野の靜かさを、描出したのであらう。

(286) **戀風の横からあたる涼ふね**

省　二＝堅からあたるでは艶が乏しい。戀風だもの「横」がよろし。――『下總へ音メのひゞくいゝ涼』などいふ、船遊びが流行した

秋の屋＝一は屋形船、一は屋根船でもあらう歟。

東　魚＝「横から」は諧謔的である。朝顔日記のやうに、舷が接して戀が成り立つ――横から戀風がくる――と云ふ洒落氣分であらう

(287) **座頭の噂飛くに行**

秋の屋＝多數の人に接するので、諸國の風俗、言語、習慣、怪談、艶話等、自分の耳に聞いたことが、續ぎ〳〵に出るのである。

東　魚＝これこれと、取りとめもなく、連絡もない話振りを「飛々に行」と云つたのか。

省　二＝座頭の話などは、次ぎから次ぎに、飛々の方が、罪がなくて興があるもの。

(288) **清瀧迄はかつく挑灯**

秋の屋＝清瀧は京都北郊の清瀧川のことであらうが、情死者の屍を捜索するとでもいふの歟。

東　魚＝何をかつぐのか不明である。灯さぬ挑灯を竿などで肩にして行くのか。清瀧あたりから木下闇みの暗らさに、灯すとでも云ふのかと思ふが、どうもわからぬ。

省　二＝「挾灯」をかつぐのであらうが、特に「かつく」と云つた處に意味もあらう。清瀧といふと高雄、槇尾、栂尾の紅葉を聯想すれど、此句？印だ。

(289) **湯とうふの有ゆへ人の二日酔**

秋の屋＝湯豆腐が有る故に、二日酔をするのではなく、二日酔をした時に、湧豆腐が有つたから、再び盃を把るのであらう。

東　魚＝二日酔になれば、湯豆腐といふオツなものがある、かまわず呑め〳〵と云ふ心持ち、湯豆腐で迎酒をやれば、二日酔など恐るゝに足らずの意である――體驗大に有之。

省　二＝結局酒呑みのやりたがる、湯豆腐で迎酒の興味だ。

武玉川（前號）正誤

	頁	段	行	誤	正
	四	二	九	妓	樓
	四	三	二	自樂天	
	五	三	七	恨と	白も

近作柳樽

麻生路郎選

荒鷲の家では母がつゝましく　入隊　中原銃人
留守隊へ祝攻略の旗の列　同　同
花柳病講話笑はぬ軍醫殿　同　同
しみ〴〵と春の芽を吳ぎ伏射する　同　同
連續射雲雀はみんな下りて來る　同　同
ババ・ママと呼ばして髪を切つてゐる　廣島　福岡葉留路
欲しいなと思へば賣約濟の札　同　同
常連と言はれて借が增えてゆき　同　同

千代香君の應召に贈る

もう君の身體じやないぞ赤襷　同
愛讀書何時か目方で賣る悲慘　長野縣　林幹
老人に話し掛ければ耳を指し　同　同
異端者がグループにあり又揉める　同　同
何の唄も同んなじになる乳母の節　同　同
神經を空へ尖らす世となりぬ　愛媛縣大洲　酒井肱水
喫茶店ならと眞面目な連れが出來　同　同
簡單に智慧熱なごと言ふ他人　同　同

高月溪月君の長女逝く

丹精の甲斐なく蕾ほろり落つ　同　同
さびしさをすてゝ春風吸うてみよ　尼崎　酒井斗風
金を使はず春の灯を見てあるき　同　同
末弟を養子にもらい小金ため　同　同
婦人記者裏面視察でひやかされ　同　同
出征の父へ土産をねだるなり　兵庫縣　酒井美知夫
女房はビールの値上げだけをいひ　同　同
標本の樣に植ゑてる蜜柑箱　同　同
共鳴をされて勸誘斷はられ　同　同
佛法僧昨日も今日も啼かぬなり　下關　櫻川不水
妾しのターキーグラスの中で笑つてる　同　同
春過ぎて夏來にけらし澁團扇　同　同
子等の靴皆强さうに汚れてる　同　同
郊外に住み逸早く蚊帳を釣り　石川縣小松　勝山しとし
原稿紙ハブ茶の匂ふ部屋になり　同　同
手踊の字を書く眞似とだけわかり　同　同
此處らまで都會が延びる道が出來　同　同
倦怠期こんな事まで腹が立ち　大阪　山本葉光
言ひ譯けを勝氣な女半分きき　同　同
いゝでせうねエと身近く來て座り　同　同
運轉手背中の客にものを云ひ　同　松枝靜波
汝蠅俺をからかふ了簡か　同　同
戰況ニュースアナ氏悲壯な聲を出し　京都　明石柳次
ランチからランチへ飛んだ蠅一つ　同　同
便箋へ向ふ心も初夏となり　同　同
燒香の順に抱かれて來た子供　兵庫縣　田邊由布
隣湯も獨りゐるらし晝の風呂　同　同
肩組んで午前一時のアスファルト　同　同
花園の花になりたい處女の戀　今治　長野文庫
奥さんと云ふ敬稱へ財布開け　同　同
押すときに賣る氣はあらず藏書印　同　同
大の字になれてうれしき古疊　愛媛縣大洲　米澤曉明
飛行機も船も水平線へ消え　同　同
愉快さにつられ終電車におくれ　同　同
不平なぞ並べ時間を空費する　大阪　富岡巨人
信用があつて集金人で果て　同　同
家中をひつそりとさす水枕　下關　多田市他樓
急停車知らぬ女にすがられる　同　同
友情へ打つた拍手に連れて鳴り　同　同
來客に布團の不足考へる　大阪　富本無煙
あきないに不振つゞきの灯が暗い　同　同
地下足袋をぬげば醫者より白い足　同　岩橋双虎
發展をしても泣言止まぬなり　同　同
板塀の鳥居はうまい人の智慧　同　山川富士
急行の通過した驛うす寒し　同　同
鶯の聲きくラヂオ定休日　高松　石手河鹿
戀を戀して三十の戀
背中の子禮云ふ口が廻りかね
寺男秋の銀杏に困るなり
呉服屋の人形はたびをつゝかけて

ぬすと猫想つた通り黒く產み　同
あゝすれば良かつた筈へ金が無し　大阪　石田沐天
恩給で生きる煙りを上げにけり　同
病み上りまだ加減ある笑ひやう　靜岡　乾　早智子
目を病んで日暮の街を遠くきく　同
万才の聲悲しくも友思ふ　朝鮮　弘津慶一
南無阿彌陀涙見せまいロをかむ　同
抽斗につかまるだけの智慧がつき　布施　福井いづむ
いゝ仲となつて噂を聞きに來ず　同
月おぼろバスを待つより歩きませう　大阪　澤田粒子
叮嚀なお辭儀でヘマを中上げ　同
船乘りもいゝなと思ふ春の波　西宮　阿萬万的
賽錢はチリンシャランと云つた丈　同
夜の更けた驛階段を斜に下り　兵庫縣　北川春巢
お二人さんとさんづけにして通される　同
世間から疎じられて金を貯め　奈良縣　龍田　嶋田翠峯
うたゝねの一人ぼつちも淋しかろ　同
突き返す金は血の出る樣な金　大阪　古寺謙南坊
疲れ切つた帶一筋の枕元　同

母はなくとも子は育つてゐる盆燈籠　松江　白石紫薇花
朝顏やまだ牛乳は函の中　同
複雜な掛は勝手でもめて去に　大阪　片山鏡水
今日と云ふ日を待ちかねて征く勇士　同
應召へ感謝を込めた瞳が揃ひ　同　田中風葉
小供より小さく後妻座つて居　同
マネキンよ金のくさりのごらはれか　松本　小宮山雅登
地藏さま啞になるべくまなことず　同
出征を美やみ日々を服む藥　豊中　丸橋松雨
常識をけなして狹く住む世間　同
仲裁は喋り疲れて埒あかず　長野縣須坂　高峰柳兒
繼ついに嵩じて署長に裁かれる　同
妻の留守見かけて呑みに出る話　大阪　米谷松太樓
息が切れますと鋸かして呉れ　同
藤棚へとごかぬお手々抱かれに來　尼崎　山田南農路
投キッスみなに許したやうに見え　同
手相本三十過ぎて吉とあり　山口縣厚狹　和氣山尾
萬歲の旗に春の子も双手擧げ　同
眉の塵これが地獄と云ふ世帶　嶋根縣　竹本坂郎

田植唄行進曲となつて書　同
躓いて少し慌てた金魚賣り　名古屋　平田素天
苗五錢也とは見えぬ糸瓜棚　同
野邊送りこれが最後の男泣き　下關　小畑柳星
パラソルがカメラと知つて下を向く　今治　田窪良矩
よみがへる思ひはみんな暗いこと　大阪　池田悠起
長火鉢苦情出さうなとこで立ち　同　宮口芳醉
眼帶をとればまぶしい初夏の書　同　馬越花蝶
孝不孝みな赤飯で祝つた子　下關　岩崎勇幸
出陣の候文に首は寄り　山口縣　口廣半休
若葉吹く靜けさ二人きりの旅　尼崎　飯尾寄與史
足音も高く面會さんが行く　豊中　山本美智子
大あくびでて顏洗ふ一人者　下關　石津流星
隊長も今日は笑顏を見せて居り　大阪府　大島石艸
停車場の見える處で別れて來　大阪　竹内春坊
待望の汽笛は木樹をゆるがせて　廣島　奥富天作
毛虫居て繼の二人は歩きだし　大阪　金田柳芽
初めての背廣心齋橋の夜　同　宮口玉葉
新婚の春へ舊友醉つて來る　同　大西伊佐緒

美髮は紳士道！

フケ・カユミを止め白髮・若禿を防ぎ
明朗な青年美を創る伊豆椿ポマード

頭髮のホルモン劑（コレステロール配合）

伊豆椿灰皿ポマード

御使用後ともスマートな灰皿になる新案容器！

全國百貨店、有名化粧品店
藥店、小間物店にあり

伊豆椿香油本舗
大槻彩芳園

★川柳街雑筆

鳥山一歩・長野文庫・畑田よし江・山本葉光

活火山の偉觀

鳥山一歩

麥の穗の一すじ道に月まろし

久方ぶりに塚口に釣りに行きました。歸途の句でした。

〃川柳雜誌〃いよ〳〵本格的の生氣と壓力を感じます。前途の壯觀期して待つものです。

○

紀元前四八〇年頃の哲人プロタゴラスは、プラトンをして言はしむれば彼は「自らを智慧者と名乘り、教育と德の教師として、それによる報酬を取ることを以て正しいと考へた最初の人」といふ事であります。そして彼の言葉に

習學なくして技術なく、技術無くして習學なし。

教養は深からざれば精神のうちに發芽せず。

といふ如きが有ります。

前者は、テニスマンの私にはよく解ります。そして、後者には考へさせられ反省の訓へとして愛誦してゐます。

そのプロタゴラスが〃報酬取るは正し〃と喝破した最初の人であると知つて、庭球教師を以て自任發表したことのある私としては、忘れ得ない人であります。

貴殿の場合は、小生の消え去つたに比らべて將に〃活火山の偉觀〃を呈してゐるわけであります。

〃川柳雜誌〃の本格的生長の姿を見るにつけ、前途を祝福すると同時に〃詩人の信念は哲人の信念に等しく堅確なり〃と豪語していよ〳〵御自愛加餐あらんことをお祈り申し上げます。

（六月一日）

大乘川柳

文庫生

支那人が事業經營上では不思議に協同一致の精神を發揮して居る事は大阪の川口邊や神戸三宮附近で合資、合議で仲々盛大に商賣をやつて居る事を見ても分るが、商賣以外の他の方面では、どうも何事に依らず、歩調が揃はぬらしい、團結なき處に勢力ある筈なく外國よりは侮りを受け、國内では永年に亘り軍閥が爭鬪を繰返して居る、これは一にこの協同の精神が欠如して居る爲だらう。實際支那が日本のやうに團結一致して外敵に當るとすれば敵として甚だ怖るべき國家になるだらう、とは誰しも想像する處である。ところで吾等が趣味として居る川柳―その作家間―の社會にも稍々これに近い協同不一致の點がある事は否めない。それは柳人として他から侮りをうける事にもなり、又川柳人として寔に恥づかしい次第ではあるまいか。ともすれば先輩を叩き落として、出シャ張らうとする者や、他人の名聲を嫉んで、色んな策動をする小人輩のあるのはどうも困つた事だ。

一致協力、滅私奉公の大精神によつて、日本が今日の如く發展伸張して來た事を思ひ、個人的には色んな事情もあらうが、川柳人として川柳を愛し柳界の發展進歩向上を希ふならば、よろしく一切の「おれが」「おれが」の島國根性を一擲して、互讓一致大いに川柳の爲に盡すべきだ。今や國民精神總動員の秋川柳人も又總動員の要がある。そうして趣味報國の實を擧げねば嘘だ。この意味に於て吾々は綜合川柳雜誌の誕生を期待し又全日本川柳人が、川柳入協會を一層強化し柳人の大同團結を熱望する。

書け一奇に 全国便箋

父炭車を懷ふ

畑田よし江

釣竿へむなしく春の風が吹き

路郎先生が父の追悼句として下さつたものである、歳月人を待たずとはよく云つたもので父が死んでからもう七十餘日にもなる。そして父が好きだつた新緑の五月が訪づれてきた。父はとても釣が好きでシーズンになると閑を見ては竿を肩に早朝からずつと夕方頃まで…時としてはよく釣れて夜遲くまで行つてきた。

昔は友達も相當あつたものだ

川柳評釋百句

車窓暖かチルチルミチル顔並べ

形水

車窓には金粉を撒きちらしたやうな春の日射しが躍つてゐる。そこへ顔を押し並べた我が子たちを青い鳥のチルチルミチルに比する詩情の豊さだ。

夏の海もこの廣さこなつて暮れ

四塊

色とりゞ〳〵の水着で埋まりいもを洗ふやうな混濁の海だつたが、落日と共にピーチパラソルは疊まれ、ケープの群れもいつのほゞにか姿を消してしまつた。ただ飛込臺が黑い影を海へ投げてゐるばかりだ。

(V)

麻生路郎

孝行をするは無學な兄ばかり

豊

家業は小學校しか出てゐない兄によつて繼承された。そして兄がゆるぎなき家の柱となつた。學のために學をする弟妹の心耳を憐れむ。

妻の智慧昨日あたりの家庭欄

昭象

紙屑と銀紙と毛糸類と鐵屑とそれ〴〵の屑籠が用意された。其の智慧の震源地は、なあんだ昨日の家庭欄か。

鉛筆の便り不幸な娘を思ふ

三雷波

薄幸と云へば薄幸だが、この種の不幸は半ば娘の罪に歸せねばならぬ。社會面がそれを證據立ててゐる。

が最近では老友も殘しよく獨りで出かけて行つた。父は兩親に早く死なれて兄妹も從弟も無く從つて親類も何處に存在するのか、それさへもわからぬ實に天下孤獨の人であつた。海に山に大自然が好きであつたらしく小さい私を連れてよく母の田舎へ遊びに行つたのも懷しい思ひ出となつてしまつた。父を亡くしてから「あきらめ」の一節…花は散りゆくものぞかし、人は去りゆくものぞかし…の詩が腦裡から離れない。

父は孤獨の人であつたが、實に磊落で血緣の無い淋しさなんか、一向に氣にしてゐなかつたやうに思ふ。

大聲で呼んでも見たいお父さん　四、三十

的確な照準

山本葉光

「戰線と川柳」として四月號の川雜にて、活字になつた句で、五月廿一日にBKから第一放送で路郎先生が話された句、

便所にも貼る照準は的確に

は、今回の事變中の第三國の爲め、良民の爲めに、いかに日本軍は盲彈をいましめて、百發百中の的確をつとめてゐるか、その枚擧にかぎりがない程なのだ。その標語が便所にも貼つてある。落語に、小蠅を追ふ小便の話があるが、その砲列の的確をいましめた輕いユーモアも含んでゐると、解しても好いのではなからうか。

×

「夜に爪を剪るのは不孝である」それは迷信である。が、孝行らしい事の一つも出來ない自分としては、せめて夜だけは爪を剪らない事にして、句の上で孝行の万分の一つをもと務めてゐる。それが川柳による正しい修養だと信じてゐる。

夜の爪を剪らぬも少まを孝の中、

我が影に馴れて鰥の帶をとき

法外

人生鰥となる勿れか。丸刈がうつる。痩せつぽちがうつる。それがみんな自分の影だ。欠伸をすれば欠伸の影だ。馴れては何んの變哲もない。そろ〳〵寢るとせう。

月給は違ひ娘は同い歳

ライト

課長の娘も十九だ。部下の娘も十九だ。だのに月給は違ふ違ふ、まるで違ふ。何處で何う違つたのか。考へない方がいゝだらう。

ポートラップ組に連らなるうちのぼん

沒食子

あまつたれのうちのぼんも、そろ〳〵ティールームの味を知つてポートラップ組の末席を汚すやうになつた。そしてボレロがごうの斯うのと云ひ出した。

誘惑のあんな男に名文句

よし江

果してどんな名文句か知るよしもないがタイプライターでうつアイラブユーでないことだけは確だらう。あんな男とはどんな男か、蟹は甲羅に似せて穴を掘るといふが。

女中より犬が大事な家並ぶ

美知夫

部長級、支店長級の住む住宅地街、戸別に犬を飼ふ。犬のための肉、犬のための散歩はあつても、女中のためのソレはない。少しく考ふべし。イヤ大いに考ふべしだ。

幼稚園行を見送る一家無事

大門

赤い屋根、蒼い屋根の門口に立つて「タ・カ・コ・チャン」と呼べば、「ハーイ」と答へるそれは實に甘い音樂だ。幼稚園行きの子を見送る一家を祝福する。

出世していよ〳〵これぬ國訛

有石

訛は國の手形だそうなが、出世していよ〳〵これぬ國訛の代表者は大臣閣下だ。

あらゆる趣味のお稽古場
松坂倶樂部
手はじきから奥義まで
氣輕く、樂しく、御上達
會員募集
お稽古種目
長磐唄
常津唄
清元
小唄
鳴物
箏尺八
舞踊曲
謠曲
能樂
ピアノ
聲樂
書道
日本畫
茶道
華道
料理
洋裁
俳句
川柳
道學
氣
棋
松坂レコード
吹込所
川柳講座
川柳雜誌主幹
麻生路郎先生
擔當
はみ込申御
七階松坂倶樂部へ
話電(代表)戎三〇〇三番
松坂屋
大阪日本橋

川柳塔

路郎選

大阪　高橋かほる

小コツブ知つた顔には會はぬもの
盛り場へ聞える喇叭下手と云ひ
儲かるかあかんと八百屋同志なり
ルンペンの手にひつついた柏餅
書き方屋へ行くかと母は縫ながら
石段で共に笑ふた老夫婦
チンドン屋東西家よりじじむさく

同　橋本綠雨

淳仁御陵
みさゝきを老樹で覆ひ汐匂ふ
金刀比羅宮
願望がかなひ寄進の多いこと
巡禮
巡禮の姿野に行き山に行き

同　奥村丹路

ふたりゐる夜を淋しとも愉しとも
煙草盆お前もいたく疲れ氣味
あらたまつておかしきは妻の顏
三十の朝のうれひの齒磨粉
磨かれる靴と女のしあはせと
夕涼にあらず橋ある交叉點
感情をぶつつけたき日も靴をはき
戰地より借りた日の事書き寄こし

兵庫縣　水谷鮎美

鏡に問へば夜おそろしき夢をみる
先輩の眼のするどさに林檎むく
枕蚊張人形の足へ蚊がとまり

大阪　姫田夕鐘

音沙汰が無いと思へば新世帶
きつかけは重い空氣の高砂家
大阪の煙がつゝぬけてゐる鯉幟
素人にしたてゝ旅へ連れてゆき
ビール酌ぐ手がしろうとになつてゐる

大阪府鳳　妹尾變人

襟足をふかゞ見せて灸のあと
五六人乘る圓タクをまだ値切り
損をして居ると見えぬ折かばん

大阪　須崎豆秋

夕刊の子供がぬくい釣くれた
このあたりよく人が死ぬ月見草
戰爭で首のちぎれた麥を刈り
號外も知らずにボイラ焚いてゐる
茶つ葉服なぞ着て社長よだます氣か

同　西いわを

玄關は深し主人は茶の間なり
ゴルフアーの一人傷病兵へ敬禮
道塞ぎラヂオ體操叱られる
ドライブに飽きて金魚に餌をやり

同　後藤青兒

男性に喰つてかゝれる程すさみ
牛の列淋しく鳴いたアスハルト

柳界展望

全國川柳界のこと各地川柳人の一擧手一投足を此展望欄ですぐわかる樣にしたい。皆樣の御通信を歡迎する。（係）

催

▼川柳雜誌五月例會は二十二日六厘坊忌として、淸水町誓得寺で開催され、大阪の柳壇の恩人六厘坊について路郎主幹の講演があつた。

▼みちのく吟社は創立滿二十周年を記念するため、六月十八日十九日黑石町の公會堂で六月下旬は靑森市松木屋デパートで川柳趣味展覽會を開催するとの事

▼有恒倶樂部の有恒川柳會では五月二十一日路郎主幹出席のもとに行先ミステリーの吟行が行なはれ、新世界市場、通天閣、堺の水族館、蘇鐵の妙國寺、開口神社、仁德御陵と歷訪、午後五時半から前號記載の通り路郎主幹のBK送放に隨伴聽取、同放送終了後再び一行は淀川を上つて鮎の茶屋で句宴。なほ二十四日夜は定例會開催。

▼阪大柳會は五月二十五日に開かれた。路郎主幹出席。

▼川雜廣島支部は四月二十六日二級の瀧へ吟行。一行は久米雄葉留路、千代香、麥作、白外郎天作、草雲子、かなめの諸君。

▼川雜下關支部は其創立句會を四月一六日、日露戰役の勇士（召集令と題して浪花節に今なほ其名をたゝへられてゐる）松岡幸浩氏宅二階大廣間で開催した。川雜廣島支部同人からは祝創立の短册を寄贈され、九天君麥作君が廣島から出席されたと

▼川雜廣島支部では植山九天君を支部へ送る會を六月二日廣鐵倶樂部で開催した。久米雄君も幹事の葉留路君も九天君の後を頑張るべく大いに意氣込むでゐる。

▼尼ヶ崎住友句會は五月二十三日夕刻より住友金屬株式會社鋼管製造所の倶樂部日本間に於て開かれた。路郎主幹出席。

▼松坂倶樂部趣味道場の路郎川柳講座は五月一日と十五日に開講した。路郎主幹出席。

消息

▼金井有爲郎君（長野）世界一の銅の大佛さんが湯田中に出來たこと並びに五月八日に湯祭句會を開催したとの通知に接した。

▼今枝思老山君（大阪府）櫻屋孫平のペンネームで大阪時事新報日曜特別夕刊へ日曜特輯讀切小說として、「大塩父子」を發表され、非常に好評を博された。

▼植山九天君（廣島）は六月早々鐵道省から支那へ派遣される事になつた。

▼大森千代香君（廣島）は再度の召集を受け、去る日〇〇港を出發された。

▼橋本綠雨君（不朽洞會員）は五月二十九日に淡路官幣大社、淡路陵、栗林公園、屋島琴平を巡り岡山後樂園を見物された。

▼名古屋木材新報社では今回「木塲柳壇」を創設し、雜吟を募つてゐる。

▼菅村末天君（朝鮮大邱）等は大邱稅務監督局關係應召者に對し局より慰問袋贈呈の際慰問川柳をものして送くられた由。

▼去る三月二十三日の川柳雜誌社天體川柳會の句を天文學界の權威山本一淸博士の雜誌「天界」へ轉載される事になつた。

▼佐々木三福君（大連）は五月七日川柳雜誌社事務所とつい目と鼻の先の新大阪ホテルより大阪を詠んだ句を寄せられた。

薄情に廻轉椅子は一まはり
悪口を言ふのに上着ぬいでから　大阪　大西八歩

金策の瓜のよごれがふと淋し
使節團こゝは東京二重橋
月見草夏の心にせまるもの
拐帶の空を忘れた日がつゞき　宍道湖にて

宍道湖の風は一畑鰐淵寺　大阪府柏原　宮岡白峯

職工に制服がある長期戰
亦一人乘り遅れてる春の日よ
日曜日子供服屋だ雜貨屋だ　大阪　中西おさむ

父ほどに道樂せぬを母わらひ
たくらみもへつらひもなく妻寢入る
ビール一息金魚の泳ぐのが嬉し
借りのある人に出會ふたハイキング　同　加藤ライト

命日を避けて魚釣りやめられず
罪のない顏で子供は菓子と寢る
勸誘のあつさり歸りあつけなし　今治　鳥生古弗

原稿紙一二行書き街へ出る
サボテンの形に似合ぬ花が咲く
掌に形殘して蚊の末路　大阪　正本水客

兵子帶の廣さ嫌みが目にのこり
峠こえて道は青葉の中へ下り　道後溫泉

湯にかゝる順番がある桶を持ち　豊中　黑川紫香

ひたむきな氣持へ星が一つ墜ち
池の鯉思ひに耽けるとこへはね
蛤の舌つかむべく腐心する　大阪　丸尾潮花

幾度か知れぬ握手の袖が派手
鳩時計借家の窓へ向いて鳴り
亂れ咲く花に里子の育つ村　大阪府高石　大坂形水

その眼差し男の嘘を探りをる
自宅でも診ますごてらのまゝ診ます
ランドセル菜の花路を馳けて來る
車窓暖かこゝは明石のお舟がたんと

○　金澤　安川久留美

淋しいから燐寸一本摺つてみた
よろづ神よろづ履物アスハルト
蘇鉄勇ましく長屋の干場かな
犬まろく張物板の裏に寐て
子鴉よ濡れた瓦が冷たいか
花柘榴植木棚では物足らず　兵庫縣御影　長崎柳秀

出迎の傘へこやみになるにくさ
金策の膝をも知らず子は眠り
すぐこわす玩具を買うに氣をつかい　廣島　濱田久米雄

病名は云はず轉地をした知らせ
歌ひ度い咽喉を見つけた指名權
春おぼろ戀のとりことなりし身の
一本のマッチ勿體なくも消し　今治　渡邊曉童

口笛はみぞりを渡る風に鳴り
枕蚊帳一つ動かぬ白い雲
枕蚊帳風が變つた鯉幟

▼名古屋の稻垣正穗君春圃君等は五月一日定光寺へ川柳ハイキングにゆかれた。

▼今治支部では今夏五周年に相當するが、宵明君が不在なので記念句會のかはりに今迄の記錄的なものを集めた小册を刊行される由。目下曉童君が輯錄中。

▼戸倉普夫君(兵庫縣)は滿州から歸り二日ほど椿溫泉へ宿泊の後東上された。

▼小西無鬼君(兵庫縣)四月中は青年學校指導員として出動、同月十九日は入隊毎に軍人會が宿舍案内をするので、夜七時から十二時半まで出動大多忙のただ中で北幹夫君に面會された。

弔

關根山彦君(大阪)の嚴父道三翁が永眠され五月二十九日阿部野齋場で告別式を營まれた。路郎主幹燒香。

轉居

▼春元紀太君は旭區放出一九九へ

▼柳友會事務所(東京)は東京市芝區濱松町三丁目三ノ六田中方へ

▼鷹巢清治君(高須啞三味)は大連市東公園町、滿鐵本社内滿鐵社員編輯局へ

改號

▼福井尺琴君(布施)はいづむ

正誤

▼前號川柳塔の潮花君の「うたゝね」の句は誤植に付削除。

社告

▼朝田新水君(大阪)は事業の關係上、事變終了まで一時不朽洞會を退會。但し川協正會員は繼續。同君は川柳雜誌社の古參であり多年句會其他の催物に盡力した人だけに退會を惜しまれてゐるが事情止むを得ないものとして不朽洞會の名簿から拔くことゝした。復活の日の早からん事を祈る。

川柳・雜・案内

六號活字十四字詰三行金五十錢、一行增すごとに金十錢(但し前金切手代用可)改號、移轉、句會案内柳書屬告、その他

川柳を作る人愛好する人の必讀誌
毎月一日發行　一部廿錢　送料一錢
川柳倶樂部
東京牛込區揚場町八川柳倶樂部社

東海の代表誌
川柳草薙
一部一〇錢　一年一圓(郵税共)
名古屋市南區八熊町寺田
發行所　草薙川柳社

川柳さやり
菊判毎號七十數頁
毎月一日發行　一部廿五錢
東京豊島區高田本町二ノ一四六八　**川柳さやり吟社**

京
一部十錢　一年一圓
京都市西木屋町四條下ル
發行所　京都川柳社

月刊川柳
みちのく
一部十五錢　一年一圓五十錢
青森縣黑石町　川柳みちのく社

三味線草
一部廿錢　一年二圓
大阪市此花區西九條二ノ六二
大阪媛柳川柳社

「大正川柳」第五一號及び第五八號相當の代價にて讓受けたし
川柳雜誌社内　BB生

懸賞川柳
課題「はみがき」七月十日
「娘」八月十日
用紙は官製ハガキ(化粧柳壇と明記の事)選者麻生路郎氏
秀逸數句に薄謝を呈す
宛先　大阪市西成區玉出本通三ノ三六　麻生路郎氏方
化粧新聞社柳壇へ

談漫撲相

森東魚　川柳

路郎主幹は學生時代相撲選手だつたさうな。あの闘志満々たる様子では小兵だが、相當うるさ型だつたらうと思ふと一寸面白い。私も相當相撲は強かつた。さうして好きだつた、私の中學——東京府立第四——は、劍柔道と角力は盛だつた、何しろ、テニスや野球は、夷狄の遊びだと云ふ漢文の先生などが居た位だつたから

國漢の主席武道の主事を兼ねなどと云ふ穿ちも出來さうな事だ。

私が回向院の本場所を見たのは明治三十二年五月場所だから隨分古いものだ、小錦が横綱で露拂逆鉾、太刀持源氏山と云ふ顔振れ、此の源氏の太刀持と云ふものは、形の良い事で稀に見るものだと云ふ評判だつた。成程其後の歴代の太刀持を見ても肘の自然な曲げ工合、太刀の高からず低からぬ捧げ工合どうも源氏程の良い形を見ないやうに思ふ。

横綱は三分のやうに連れて出る入山形に二つ星三分の花魁の見立とはどでごんすでもあるまい。

私は小錦から鳳位までを一番數多く見たのだが、強い横綱と思つたのは、常陸山と太刀山だつた。

雲慶の作のやうなを九枚揚げこれは太刀山が優賞額を國技館へ九枚あげた當時の拙吟である。其後これに劣らず栃木山が猛威を振るつたものだ。

右筈に天下無敵の〆を張り
久良伎

は、栃木山讃賞の名吟である筈の押切りと云ふやうな勝負は近頃は餘りない、投げ業が多いやうに思はれるが、上突張りや筈押しの妙味は失はれ度くないものだ。それに近頃は、引分けや預りの相撲を二番後などに、或は直ちに取直させたりするが餘り勝負と云ふ事にのみコダワリ過ぎて床しさがないと思ふ。尤も引分のあつた時分には隨分八百長もあつたと云ふから一概には云へない。

引分を八百長にして通を振り

引分だと云へば、八百長だなんと云つて通がる見物も是亦厄介物の一つではある。今の高砂が朝潮時代に、國見山と取組んで、水が入り、其時國見の膝に痛みが出たのを知つて、仕掛けず引分けたと云ふ美談が殘つてゐる。此の角力は私も見物してゐたが、其事は後に傳へられて知つたので、水入後互に少しも仕掛けないと思つて見てゐたに過ぎなかつた。

痛み分け棧敷の雛妓目をつぶり

「片や痛みあり引分け」などと行司が振れるのも一種凄慘な氣分が漂ふが、近頃拳闘試合の流血を喜ぶ女性ファンも隨分あるさうだから痛分け位に目をつぶるやうなのは近代人ではないかも知れない。

水の入る時は、行司の儲け所、見せ所である。

元通り組ますと行司喰はせる

行司が合圖の背をハツと叩く時の意氣が何とも良い味がある。

昔は近頃のやうに土俵入りなども時間がきつちりしてゐなかつた。仕度が出來るとぞろ〳〵出掛けて來る。土俵で仕切つてゐるのは一先づ中止して土俵を下りて土俵入りを濟ませると云ふ風だつた。

土俵入り仕切りこぢれを追ひ下ろし　夜叉郎

此の句のユーモラスな點も今はピンと來ないであらう。

土俵入りかごめ〳〵の姿なり

此の拙吟は今も通用するだらう。力士の輪の中に行司のかぶんだ形は今も以前も變りはない。

横綱になつてから負の込むのが以前から隨分ある。本當の貫録も實力も備はらないうちに興行制策の爲に却てまだ伸びる本人を萎縮させてしまう。鳳などは其例だ横綱にせずに取らして置けばまだ〳〵面白い土俵をみせたらう。武藏山だつて尚早の感があつた。あの力士などは全く横綱になる素質充分であつたのだから、急がないで尚一二場所見合はせたら立派な横綱になつたらうに、變にコヂれた形になつてしまつた。私は大阪場所で見た時どうも生氣を缺いてゐて氣の毒のやうに思へた。

深幌で出る横綱は土がつき場所への往復の力士達が綱曳きの人力車で行く姿は一種の風致があつた。現在はどうだか知らない、勝つた力士は思ひなしか反り身で意氣揚々としてゐたものだ。幌を深くかけて歸つて行くのは淋しい限りであつた。今こそ勝負はラヂオで目に見る如く分るが、以前は見に行かなければ翌日の新聞までは分らない、只勝負付賣りが町々を廻はりはしたが、東京中隅なく行くわけではなくホンの近い所位のものであつた。この勝負付は角力が打出しになると同時に小屋の外で呼賣りをしてゐたもので其早い手際を感心したものだが今では馬鹿氣たやうな事だ。「勝負付ヤ勝負付ケ」と美聲を張り上げてゐたのは惡くはなかつた。

兩國は勝負付からたそがれる

さるにても双葉山はたいしたものだ。完璧の横綱と云ふべきだ。何處まで續く白星ぞ——何としても其風格が良い。

負と云ふ字は辞書にない素晴らしさ

然し彼氏とても兩親も何もない孤獨の境涯だと云へば、何かなしに心淋しきものもあらう。又、勝利者が味ふ一掬の哀愁もあらうと云ふものだ。

横綱のいつそ淋しく勝つとは

兎も角、現下の狀態は正に國技萬歳、協會萬歳、ファン萬歳の時代ではある。双葉山健在であれ、さうして打倒双葉陣亦健在であれだ。

國技館書を忘れた月の色
（完）

馬尻

古句研究

石崎柳石

我が王朝文化華かなりし頃は何と云つても所謂公卿殿上人がそれが創造に重きをなしたのでわけて藤氏一門の勢力たるや遂に望月の缺けたることなしとまで詠ぜしめる豪華振りを發揮して、美的生活の背景に藤原期の藝術を生んだのである。才智ある女性は選ばれて、藤氏一門の女が宮廷裡にあつて權勢を得る爲めに附添ふことゝなつた。かくて斯る女房群の中から、紫清の二女は頭角を現して、終に史上に芳名を遺すに到つたのである。一方、男性側では、何んと云つても家系門地で斷然藤氏に非らざれば名を成さずであり その一門中にあつても醜い地位爭ひに寧日なしとは史上に見る所である。かゝる時代には、門閥なき者の榮達は、到底望み得ないのかと云ふに左に非ずで、只一つこゝに剃髪して僧に成る途があつた。智者は惑はずと謂ふが、圓頂緇衣に籍をおくと惑はす榮達の途を邁進し得られたものである。榮達の方便に僧侶が輩出した時、佛的儀式はいやに壯重となり、金ピカの僧衣が特に有難味を帶びて來る。が思へば、こゝから佛教精神の腐敗が始まつたのである。之はかつての貴族政治下の側面觀である。

さて、武家政治の覇者としての德川氏三百年間の狀態は、がつちりとした封建治下に嚴たる士農工商の階級制度の時勢にあつた。かゝる治下の形式的な格一主義に律せられて、榮達出身のあくなき慾望者は、權謀術策所謂お家騒動物の種はかゝる徒輩がまいてくれたものである。茲に此の時代の榮達の輕捷法としての尻馬即ち妾が兄に就ての古柳句を檢討してみたい。

「尻馬」とは、辞書に據ると、人の乘つた馬の後に乘ることから、人の後について其の力を借つて物事をする意とあり、尻馬に乘るの句は巷間よく用いられてゐる所である。

○妾が兄尻馬は拙上手なり
（柳樽四十篇）

○俄武士けだし妾の兄にして（同　十六篇）
○大小をころしてさすが妾が兄（同　十七篇）
妾（メカと讀む）の兄は、妹の氏なくして玉の輿の榮達に、尻馬となつたもので、
○若殿は馬の骨から御誕生（柳樽十篇）
ともなれば益々鞭使ひが手荒くなるのであらうが、どうせ側からは成上り者の俄武士と評せられ、大小二刀に自ら身に添はずさせばきつと窮屈の、やれ腰が痛むのと言出すは必定——
○妾が兄馬と刀にいきやくする（柳樽卅九篇）
となると、刀のみならず閉口するは尻馬乘りの本物の馬には乘りこなせぬ珍風景がある。
○御てかけの弟正宗さして居る（同十九篇）
これは弟の方で、きつと拜領の業物、そねめそねめであらうが、泣いてるは眞正眞銘正宗であらう。
○御めかけのいふ程の事是となされ（五篇）
○御妾が何をつげたかしくじらせ（四篇）
○浪人をこしらへるのが妾上手（廿一篇）
かうなると妾が肉身の榮達は愈々以て滿身敵視であらう「立つものを寢かす計の御奉公」（卅六篇）にとの側の口はかしましくこゝに國家老（江戸家老に對し）領地で勤務に服し、主君の參勤の留守を預る家老の登場場面となる。
○酒池肉林の中へ出る國家老（卅九篇）
○ひんけいにあしたはさせぬ國家老（同）
○國家老ほしいまゝにはさせぬ也（四十篇）
お家の一大事と、老の皺こし伸ばしてまかり出でたるは國家老、緊張した空氣にシーンとする處——
○おめかけの寢耳へ水は國家老（卅五篇）
○國家老成金めらをにらみつけ（四十篇）
○かつおそれ且はぢしめる國家老（同）
○國家老妾殿樣三んすくみ（同）
○殿よりも一目强い國家老（同）
○國家老すみうちをして物を言ひ（同）
○家老職居つたなりも國がまへ（卅九篇）
○國家老曲つたところは腰ばかり（同）
これらの句に剛直な國家老の風貌が想像される。きつと切口上で「先殿の代はぺんともならされず」（四篇）てな事も云つたに違ひない。此の五句目は、仙臺藩白石城主、片倉景綱、通稱小十郎（一五五七——一六一五）の事を諷詠してゐる。
○國家老實に大國の片眼なり（卅九篇）
獨眼の伊達政宗を輔けて、威を奥羽に振つた國家老である。天正十八年、豊臣秀吉が小田原を討伐するに當り、景綱は順逆を說いて政宗と共に小田原に至り秀吉に謁せしめて伊達の社稷を安泰ならしめた。げに殿よりも一目强い國家老である。
○鳥有る里にして反る國家老（卅九篇）
○國家老もと唯一の鈴にする（同）
斯くてお家安泰目出度し〳〵ではあるが、かうなると妾の兄は全く尻馬から落ちた儘の泣面であらう。川柳子は、之がラストシーンに二句をおくつて曰く
○おめかけの素顏御拂箱と見え（六篇）
○何院になつておてんばいゝ仕廻（四十篇）

眼複人詩 (2)

高鷲亞鈍

ヘレン・ケラー女史

ヘレン・ケラーが來朝して去年はどえらい奇蹟を日本の津々浦々までふり撒いた。ヘレン・ケラーと塙保己一とどちらが豪いかといへば、僕は塙保己一の方が數等豪いと思ふ。ケラー女史が、盲聾、啞で、塙氏は盲だけだから豪いのは當り前であるといふわけにはゆかない。其麼事を言へば、完全な道具をもつてゐる吾々は彼等より、ずつと豪い筈であるのに、殘念ながら、落ちるぢやないか。僕は、さういふ比較をするなら、逆な觀察をして、盲だから、聾だから、啞だから、手が無く脚がないから、豪くなれたのだと言ひたい位である。僕が、ケラー女史よりも塙氏の方が豪いと言つたのは、さういふ意味でなく、その人の態度である。境遇から言つても、ケラー女史は家庭教師も置けるし、充分彼女の不具を矯正し得る凡ての人智を傾けられる財寶もある家庭に育つた御孃さんだつたが塙氏は呑百姓の息子であつた「群書類似」「武家名目抄」を自らの好學に燃えて爲した自力を僕は買ふ。ケラー女史はサルバーン先生や其他澤山の獻身的犧牲者なくては豪くはなれなかつたのである。

ケラー女史と、塙保己一氏と比較して、西洋と日本の斯る不具者の態度と扱ひ方に相違があるのを僕は認めずにはゐられない。それは、西洋は、盲を、目明きのやうにみせ、聾や、啞を聾や啞でないやうに見せるのに對し、日本は盲は盲のまゝに置いてゐる。万一彼ら不具者に愛と同情を寄せるなら、一層自分が、不具者になつてやれば、不具者は、いかなる愛情の百万言より喜こぶだらう。谷崎潤一郎の「春琴抄」に於ける佐助が、自ら針で眼を突いて、愛する盲目の春琴と同じ暗黑の世界に入りそして二人は愛の法悦に完全に這入つたではないか。塙保己一が弟子に講義してゐると、蠟燭の灯が消えたので弟子は先生の講義の中絶を願ひ出たら「目明き盲は不自由なものぢやわい」と言つたと曰ふ。何と立派な態度ではないか。この巍然たる兀骨は盲も糞もあつたものぢやない。塙保己一氏は盲を既に忘れ寧ろ盲が完全な人間であるとまで考へてゐる程の境地を、僕はこよなく尊く思ふ。

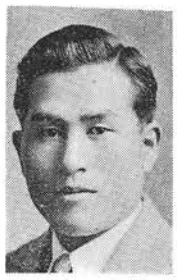
フランスの文豪、アンドレ・ジイドの「田園交響樂」は牧師が、盲目の少女の開眼に、必死な信仰と努力をした結果、少女は遂ひに牧師の祈が神に通じて開眼できた。始めて知る年老へる牧師の顏、世界。彼女は遂ひに自殺したのである。これは何を物語るか、即ち西洋の愛情はエゴイズムであつて、自分の世界に引き入れやうとするものであり、日本のそれは自分を痛めつけて、相手の世界に沒入しやうとするにある。

ヘレン・ケラーが、奇蹟の聲を發した。音を聞きわけた。櫻の花を讀みわけた。それで人々はやんやの拍手を送るとは、まことに悲しい慘酷な扱ひ方であつた。ケラーの心情は、だからと言つて、決して心樂しまないであらう。寂しく遺瀨ない自己にかへる時は屹度一人だけになつ時だらう。サルバン先生が、ケラーの爲に、獨身を守つた位は小さな犧牲である。サルバン先生が、ケラーの盲聾啞の飜譯係で高給を取つてゐるのをみて僕は寧ろ憎惡を覺える。サルバン女史が世界で一人、ケラーの如く、盲、聾、啞のうち、せめて盲にでもなつてやれば、ケラーはどれ丈、愛情にむせぶ事であらう。さういふケラーが現在、世界の思想界に君臨してゐるけれど、凡てを知つたケラーは然し、生ける屍死の如く、却つて自己は空虛であり、そして不幸である事をひし〳〵覺えてゐる事であらうと思ふ。彼女こそは世界一の悲劇的な存在であると僕は、つく〴〵思ふのである。

★柳人素描

（二七）越智伽藍堂君

伽藍堂（からんどう）、越智章介（おちしようすけ）君は半島の咽喉元にあたる釜山柳壇の重鎮だ。多く自己を語らぬ性格であるが、根強さはある。職を釜山商工會議所に奉じてゐる。



君は昭和三年二月から川柳に手を染め、既に十年の春秋を過し、釜山無盡柳壇、朝鮮民報柳壇の選者として知られてゐる。

挨拶の眉毛が青い京の宿
行末を想ふデッキに星が飛ぶ
ドンファンの心がチラと動く宵

これが君の作風だ。

君は明治三十五年四月十六日、高知縣吾川郡伊野町に生まれた。別號を扇柳子と稱し、往くとして可ならざるなき多趣味の人、特に旅行、觀劇、映畫、散歩の愛好者だ。

所屬吟社としては釜山の柳塔吟社、仁川の高麗吟社。川柳人協會評議員。

（二八）加藤ライト君

「この寫眞、蔣介石によく似てまつしやろ」斯う髯を生やすと馬占山そつくりだんねどつちにしても、わての顔は支那張りだ

川・協

★全米川柳展覽會開催

北米川柳互選會創立十周年及び月例百回記念のため皇軍慰問全米川柳展覽會が來る七月三日、四日五日の三日間沙市北米日本人會商業會議所に於て開催されることゝなつた。

寶飾品・記念品
錦
大阪市南区道頓堀西之町二五
電話南一二五八

委員長は村上蘇山君、副委員長平田素若君、會計森田玉兎君理事村岡鬼堂君、實行委員は本多華芳君、黒川劍突君、安武雀喜君、崎村白洋君、安井白色君、上野鈍突君山本竹涼君、清水其周君、土井海面子君である盛會ならんことを祈る。

★遠隔の地にあつて斯うした川柳展を催すことは絶大の努力を要するものであることを思ひ、柳友のためいさゝか應援のつもりで拙筆を揮ひ小包便で半切や短冊を出品した。東魚氏も半切を出品されたそうである。

かくして川柳の世界が擴ろがつてゆくと共に、世界地圖は縮圖されてゆく、こゝに川柳人協會の仕事は擴大されてゆくばかりである

川協會員を募る

川柳人協會も皆様の御後援により日に月に發展しつゝあります。此の際こぞつて御入會下さらむ事をお願ひいたします。

會費一ヶ年　參圓
半ヶ年壹圓六十錢

大阪市西成區玉出本通三丁目三十六番地
川柳人協會
振替大阪三一五一四

ちゃんこ料理
湖月
李紀法善寺境内

一路集

募集句

雨

帳面へ何か書いてる雨宿り　風葉
あぢさいの雨には雨の色になり　春巣
ぐつちへもゆけずに軒へ降込まれ　市他樓
御神燈遠音の三味へ雨となり　千久良
雨音へ障子をあけるにじり膝　紫香
雨宿り九官鳥に禮を云ひ　不水
母の裾妻の裾にも春の雨　南濃路
淡々と雨を見てゐる父の顔　斗風
ぐい〳〵と雨へ伸びてる綠の芽　文庫
雨宿りむつつりとして紳士ゐる　久米雄
失戀の或日雨をばじつときく　亜木
雨の糸じつと見てゐる娘は若い　秀女
母の手をきつく握つた雨の路　知繪
吹き降りに卷きついてゐるビルの旗　無煙
上草履雨に更け行く春の夜の　紫薇花
雨なごと愚痴がいへるか慰靈祭　曉明
醉醒めた窓はいつしか雨となり　美知夫
一杯のコーヒが永い俄雨　同
我事と計り蛙は雨を呼び　龜次郎
俄雨小町娘を素足にし　由布
雨の窓旅と旅とが向き合ふて　潮花
獨り身へ淋しさつのる雨となり　清
吹き降りに成つて人絹ごうしよう　須美
吹降りへ蜂の巣くろ〳〵ぬれてゐた　水客
ノーハット雨が段々きつくなり　同
春雨に獨りでぬれてつまらなし　葉光
相傘に橋の長さも京の雨　同
むらさきのコートへ雨は吹きつける　悠起
ファイバーの服へつれない雨となり　同
(軸)苔が靜かに雨を吸つてゐる　艸樂

演説

演説の外の寒さへ巡査立ち　美知夫
演説の通りに社會行くものか　曉明
演説へ胸をそらしたモーニング　松太樓
今晩は父も交つた演説會　小百合
五分間演説林檎むきはじめ　謙公
日章旗背に報告演説よ　良矩
男堂の舌春秋に逆らはず　不水
演説にもう落選の噂され　寄與史
演説をして一泊の湯に浸り　斗風
演説にきつちり立つた令夫人　由布
演説は佳境茶番は居眠つて　同
演説の草稿つくるのも役目　水客
演説の聲がかすれてゐるもよし　同
草案と違つたまゝをしやべらされ　久米雄
降壇へ拍手はお世辭とも見えず　同
大言壯語結局頼むことであり　風葉
演説へ万才の程の手も鳴らず　同
熱辯の汗を氣の毒がる暑さ　葉光
熱辯のマイク通した聲になり　同
公會堂借りて演説會も初夏　同
(佳)首相いまマイクへ向ふ咳ばらひ　同
(佳)演説も銚後を護る聲になり　松太樓
(佳)演説へグラスの水も光つてる　鴨路
(佳)演説へ欠伸が二ツ三ツ續き　潮花
(佳)演説の原稿が一枚ぬけてゐる　水客
(佳)演説へまだとけきれぬ國訛り　紫香
(佳)演説へまだ校庭に餘地があり　潮花
(人)演説の向ふの隅に母がゐる　久米雄
(地)拍手するひまに見つけた水の味　葉光
(天)完膚なき迄やつつける咽喉佛　千久良
(軸)國防の婦人も來てる演説よ　白峯
(軸)非常時をもてあましてる演説よ　同

す」といふ加藤ライト君はほがらかな男である。君が川柳をはじめたのは昭和六年九月だ

餌を探す蟻に沈默教へられ
子の足が頭へ來なくなつて秋
乘換がいつしよ年寄うまが合ひ

に君の句風を見ることが出來る。「子の足が」は愛兒を喪つた時の句なんだらう。しんみりした味を持つてゐる。

君の本名は利一（りいち）、明治三十六年七月五日大阪市に生まれ、現在大正區鶴町に居住、大阪市電氣局鶴町運輸事務所に奉職。川柳以外の趣味としては魚釣。川柳雜誌社鶴町支部同人、川柳協會評議員。

來・往・燕・飛

いろ〳〵の面白い通信に接しますので、その中から少しく發表させて頂きました（編輯局）

▼雜誌ありがたう存じました。アメリカの川柳展から川柳家の顏を十氏申込んできました。貴下もその一氏になつてますので描きました百人一句からです洋行する路郎氏と云ふところです。故人三人今人七人です小川君によろしくおつたへ下さい。武玉川輪講三氏の寫眞を見せて下さいまし（東京・宮尾しげを）

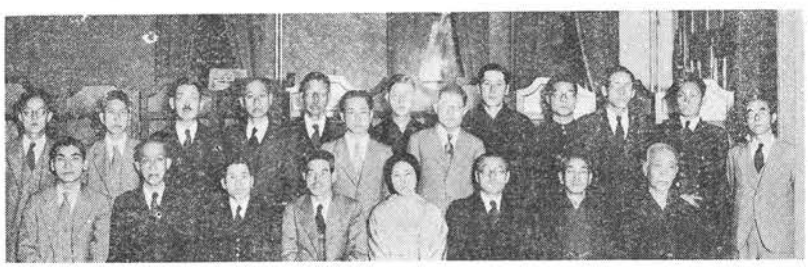
▼「趣味講座」放送が、日も題もピッタリ徐州陷落祝賀放送になつてしまつた「偶然」を感謝いたします。三十分間チョンで四十句についていち〳〵輕快な名解說をやつてのけ、スピードも大したムラも無く大變結構でした。土曜日でもあり、第一放送でもあり、時節柄でもあり、澤山な人が聞いたことゝ思はれます。葉光氏居にて豆秋（五月二十一日）

▼この繪葉書は〇〇灣上陸部隊の某氏より送つて來たものです。只今先生のラヂオ放送を聽き終つた處です。平生から聽へ難いボロのラヂオですが今日は不思議によくきゝとれ久々で先生に接した樣な氣です。益々御健闘を祈ります。二十一日午後六時、文庫（今治）

▼文庫氏と放送をきゝ徐州陷落祝賀會參加、本社の支部例會、感激の連鎖です（曉）（心府）（よしを）（淸重）

▼昨日は本校に於て東豫中等學校の國語研究會が催され校長十名、教員卅三名集まりました。其の際の小生所藏の古川柳の文獻展をも催しました所、慶ばれて終會に當り校長總代に禮を云はれました。その文獻中武玉川研究連載誌として川雜を取揃へ出品申しおきました先は近況報告まで。今治、石崎、柳石（六月五日）

▼貴誌十五周年の廣告をみて驚く、早いものに候その間殆んど思ひ通しの小生なれば自らの顏など記憶せず誌上の寫眞をみて「コンナ男かなア」と看護の家妻に尋ぬれば「耳が似て居る丈け」との事に候隨筆澤山揭載好ましく候拜具五日末日（朝鮮光州蛭子生）



（寫眞は花村氏と谷大の妻夫人の慰問）

▼「朝顏にわれはめしくふ男かな」ッてのは慥か酒へきの其角をいさめた桃青翁の句だが——とかく花時にはこの翁の寂びもまもれまい「初夏は麥酒の泡に誘はれる」柳人は豈に大阪のみならんや、卯月を重ね着する北陸の天地にも「控やぶる」男あるべし矣！（金澤・久留美）

▼川柳道發展の爲に御奮闘遊さる先生の御健康を祈ります社用にて目下青島に出張してゐます。邦人の引揚の留守中に邦人の各工場を燒き打したる支那人の暴虐振りには憤慨せざるを得ません（十二日三福生）

▼連込のさつと浴衣に着替へたり（五月二日・伊豆湯ヶ島落々樓にて鞍馬）

▼皇陵巡拜も後四五回で終りになりますのでこんど大社巡りをやりますので伊勢參拜五月六日（綠雨・美奈子）（以上何れも路郎宛）

久良伎翁古稀祝賀
記念品贈呈に就いて

日本柳壇の耆宿坂井久良伎翁（川柳人協會名譽會員）が齡ひ古稀に達しられたことはまことに慶賀に堪へない。

翁は資性穎敏直情の人、私財を投じて多年、柳壇のために貢献されたことは何人もよくこれを知る。

茲に我が川柳人協會は古稀祝賀記念品贈呈資金を晋く天下柳人に募る事とした。左記小規に據り御賛同を乞ふ。

一、記念品贈呈資金は一口三拾錢のこと（一口分を頗ぶる小額としたる理由は川柳人及び川柳に關心を持つ人々の一人でも多く賛同せられんことを希望するに外ならない幾口でも申込んで下さい）

一、記念品贈呈資金の受付は八月三十一日までとしたが、賛同と同時に、御送金ありたい。（比較的長期とした理由は出來得る限り弘く知らしめたいからである。）

一、記念品の選定及び贈呈の方法に就いては本協會に一任のこと。

一、屆先は大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地　川柳人協會。（記念資金拂込みはなるべく振替大阪三一五一四番を利用されたい）

一、右の件に關するお問ひ合はせは返信料封入のこと。

昭和十三年二月

川柳人協會

久良伎翁

☆贈呈者御芳名

十口　前田五健君（松山）
十口　奥村丹路君（大阪）
十口　近江砂人君（大阪）
十口　森東魚君（豐中）
五口　北夢之助君（樺太）
十口　龜井晟修君（函館）
三口　片山鏡水君（大阪）
小計五十八口　累計百四十八口

各地柳壇

いのちある句を創れ

投稿規定

一、用紙は原稿用紙又は投句箋の事
二、文字を正確明瞭に記載のこと
三、開催月日及場所記入のこと
四、締切は毎月廿五日とす
五、投稿先は本社宛

川柳雜誌社

六厘坊忌（大阪）

明治柳壇の天才小島六里坊忌を誓得寺で營む。當夜は雨天にも拘らず、珍らしい顔振れが見えた。路郎主幹は大阪柳壇の恩人としての六厘坊の性格を解剖紹介され裨益するところが多かつた。

出席者名（順不同）

路郎　かほる　鐵心　琴泉
松太樓　潮花　鴨路　澄風
巨人　ライト　沐天　芳醉
伊佐緒　風葉　南濃路　艸樂
紫香　謙南坊　變人　里十九
夕鐘　默平　蒼風　思老山
アート　アキラ　葭乃

兼題「表　情」　かほる選

表情の一つ一つへ大人びる　松太樓
うれしさの包みきれない大當り　ライト
出納部百圓札へ無表情　紫香
怒られたような表情して歸り　伊佐緒
表情はどうやら僕を好いて居る　芳醉
商賣と言ふ表情になり切つて　變人
表情のいる生活へ淋しい灯　潮花
笑ふ兒の表情撮つて選に入り　巨人
表情はあなどる樣な眼に見られ　謙南坊
表情はOKと云ふ眼のうごき　夕鐘
表情を今日も褒められ端役でゐ　琴泉
念押してその表情を見逃さず　澄風
表情をして見たくなる鏡なり　紫香
エキストラ表情もなくそれでよし　鴨路
嘘なのと女おどけた顔を見せ　蒼風

席題「極　樂」　互選

極樂へ泙くぞと父は手を握り　南濃路
極樂を信じて暗い道をゆく　變人

席題「チンドンヤ」　互選

チンドンヤ大きな男揃つて居　里十九
チンドンヤ歸りは跛引いて行き　默平
モガの後からチンドンヤが續き　沐天
チンドンヤ今日は敵の事をふれ　風葉
チンドンヤふと恥かしい人に會ひ　蒼風
チンドンヤ世間を馬鹿にして歩き　松太樓
飛行機を一寸見上げるチンドンヤ　かほる
目がまわりそうにクル〳〵チンドンヤ　ライト
チンドンヤ一里の路を三里行き　鐵心
飛行機を並んで見てるチンドンヤ　紫香

席題「汽車辨」　艸樂選

汽車辨を膝に置いてるいゝ景色　紫香
汽車辨を濟ませ曲つて寢るとする　變人
汽車辨を運動會が買ひ占める　默平
窓際の又汽車辨を賴まれる　同
トンネルの長さ汽車辨ふたをする　變人
汽車辨へ故郷の訛りの釣錢をくれ　夕鐘
汽車辨へ一本欲しい窓を開け　沐天
汽車辨を半分喰べて子へ渡し　風葉

席題「獨　立」　沐天選

獨立をする氣弟よく稼ぎ　潮花
獨立へ見返してやる女が居　變人
獨立へまだ〳〵若いなと思ひ　松太樓
獨立へ三年經つて花が咲き　風葉
獨立の日から商賣仇なり　澄風
獨立へ鯛が一匹はねかへり　紫香
獨立へ惡友嬉しく來てくれる　鐵心
獨立をすれば言葉が又違ひ　琴泉
獨立の今日から廢めた酒莫　默平
獨立へ人にわからぬなやみ增し　伊佐緒
獨立へ呼出し電話かゝつて來　澄風
獨立の古い葉書を出して讀み　夕鐘
獨立の祝母のつたない手紙來る　かほる
(佳)獨立をさす氣親方きつく云ひ　潮花
(佳)獨立へ母は國から嫁を連れ　默平
(佳)耳貸せば初註文に躍らされ　夕鐘
(佳)獨立の祝親方使はれる　芳醉
(軸)獨立へ眞僞の噂うるさく來　沐天

席題「野　心」　變人選

あの顔であの眼で野心持つてゐる　潮花
停年期まだ〳〵野心衰へず　澄風
昇給の野心菓子箱提げて行き　ライト
そろばんへ隣の家敷も入れて見る　夕鐘
野心家と言はれ交際上手なり　巨人
ぼん〳〵をもうとりこんだ野心なり　里十九
野心持つ心淋しい嘘を言ひ　潮花

席題「後　妻」　夕鐘選

壹錢をやるにも後妻氣をつかひ　巨人
よい母であつて後妻の痩てゐる　琴泉
御祝の返しに後妻困らされ　かほる
法要へ後妻小さな珠數を持ち　紫香
世間と云ふ事を後妻は知つてゐる　松太樓
比較せられて後妻歩が惡し　澄風
二號さん後妻へすわるあの若さ　伊佐緒
寫眞帖後妻へにがいものを見せ　鐵心
後妻ふと前の亭主を戀しがり　巨人
或る時は後妻の氣にも成つてやり　沐天
後添へは子供の思ふまゝにさせ　鐵心
訪門へ後妻娘と間違はれ　伊佐緒
後妻と言ふ覺悟があつてそれでよし　變人
派手好み後妻は遠い風呂へ行き　艸樂
(軸)後添へは體のこなしから噂され　夕鐘

川雜

岡町支部箕面吟行（豐中）

四月二十九日

溪流に沿ひて散策、稔幸居に於て作句
切符、茶店、散歩、雲、溪、瀧、葉櫻　丸尾潮花報
いゝ嫁であり母親のパスも出し　万的
改札のハンとおもた青切符　柳太
隣の人大きな聲で切符買ひ　雪春
切符買ふ父は一足先に出る　波矢子
切符買うてそぐはぬ人の中にゐる　水客
葉櫻となつて茶店も又靜か　須美
くたびれたとこで茶店が一つ見え　小百合
茶店まで後十町の急句配　稔幸
先へ出た友は茶店の隅で待ち　芳醉
掛茶屋で靴紐結ぶ友もゐる　楠美
持ち切れぬ荷物茶店へあづけとき　悠起
今日も又あの娘に逢ふた散歩なり　稔幸
散歩など誘ふ心を見すかされ　潮花
繪馬堂の上から雲が切れて行き　私水
日本晴どこから出たか雲一つ　進
溪曲るとこで名前がつけてある　紫香
瀧の音千古の響つたへてる　美鳥
葉櫻の影を見つけて飯にする　一波

廣島支部句會（廣島）

大森千代香君歡迎會

四月二十三日　於　葉留路居

福岡葉留路報

役所、茶漬け、港、顔　禾水
新任の課長髭あり顔まろく　久米雄
お役人氣質小さなことでもめ　葉留路
物堅い人と云はれて役所にゐ　千代香
少し遲れ女教師弱い子と歩き　久米雄
お茶漬けですませ新婚旗日へ出　千代香
窮屈だつたと紋付きのまま茶漬け　康津奈
子澤山茶漬け〳〵の賑やかさ　葉留路
テープみな思ひ〳〵の氣で握り　久米雄
萬感に胸せまらせてドラを聞き　同
有爲轉變港の女とはなりぬ　康津奈
顔役になつて自腹をきられる

川雜

鶴町支部句會（大阪）

四月二十二日　於ライト居

加藤ライト報

男の子、生さぬ仲、電話、角砂糖、ラムネ
私娼
男の子強い〳〵へ泣きそびれ　松太樓

バス拔いた聲は電車の男の子　双虎
春風が優しく生さぬ仲へ吹き　よしみ
生さぬ仲家出のしたい歳になり　小柳子
間違つた電話素氣なく切られたり　ライト
公衆電話五錢ですまぬよい話　巨人
砂埃ラムネもぬるい田舍道　謙公
親と子と陽影に並ぶラムネ瓶　變人
藥瓶さげて私娼は晝を出る　松太樓
だらしない女私娼にしてしまひ　粒子

川雜　**今治支部句會**（今治）
五月二十一日　於　文庫書房　長野文庫報

蚊帳、口笛

入院へ蚊帳も後から持つて行き　平尾
妻の留守蚊帳のつりてを間違へる　同
口笛で歌詞は知らない流行唄　心府
枕蚊帳一人前の場所をとり　同
日沒の間際本疊打で決す　よしを
足が出て小僧の蚊帳は暑さうだ　同
軍艦へ軍艦マーチ皆揃ひ　曉童
狙つてゐるカメラの中へホームイン　文庫
口笛へ一直線に犬走る　同

川雜　**下關支部句會**（下關）
五月十四日　於　下關昭和園　多田市他樓報

交通、友情、海峽、布團、誕生

早かごで越したでしようねこの峠　半休
近道をするでなかつた道普請　市他樓
おらが村大臣を生み驛が出來　不水
時々は里へ歸れと友の文　泰山
友情を持て餘すなり醉ふた友　山尾
忘れねばこそ春秋の便りあり　九呂平
瀨戸走る船に乘るなり男なり　不水
座布團にしびれる足の金ボタン　少坊
座布團が暖か過ぎるこわ意見　余志雄
安らかに眠る布團に不足なく　比呂志
座布團に娘心の坐り樣　不水
轉寢の子に母そつと布團かけ　一角

誕生を母舊暦でしか知らず　麥作
誕生日忘れた樣に歳を取り　市他樓
誕生日子供の爪を刈つてやり　九天

川雜　**梅田支部句會**（大阪）
五月十九日　於ほーぷ　酒井斗風報

入院

入院の雨ふる夜となりにけり　斗風
入院の靜かに想ふ故鄕の事　同
看護婦が女神に見ゆる夜の呼吸　鮎美
急報に馳けつけて來て父の顏　同
入院の窓まぶしくも兒の寢息　同

尼崎句會（尼崎）
三月二十一日　山田南濃路報

相談、入齒、空想、雛

不氣嫌を相談相手は知つてゐる　力夫
金か戀か相談譯もなし　南濃路
先づ一杯と相談あとにされ　紫水
孝行になる相談は惡びれず　美知夫
附合へと言ふ相談を持て餘し　榮句坊
相談をした献金は知れたもの　寄與史
相談をかける前から決めてゐる　文月
嫂へ相談先に持ちかける　守男
相談をして伯父さんの腹も知れ　毬夫
相談欄縮んで刺戟とする生活　久仁子
肩書を取れば話の解る人　麻斗
住古りて町の相談役とされ　川舟
相談がなつて一座はちと開き　正覺坊
小使に相談すれば利子が要り　毬夫
相談をしますと女隙がなし　南濃路
相談もいゝが本人死んでゐず　路郎
人相までかはる入齒と知らなんだ　毬夫
ハンカチの蔭で入齒は何か喰べ　寄與史
古稀祝近く齒型が出來上り　美知夫
總入齒はずして孫をよろこばせ　久仁子
臍くりをはたき齒醫者の門くぐる　柳千
支那兵が金の人齒を見逃さず　南濃路
入齒せよと他人はたやすく云ふなれ　四一
貧しさと別に金齒は光つてる　伊藤

青春を裝飾的に入齒する　麻斗
微笑めば金齒が見える淋しい妓　毬夫
齒醫者から金の相場を聞かされ　柳千
この節季入齒をせずに越すつもり　路郎
空想は東京驛で破れたり　美知夫
空想は醒めずに靴を磨くなり　同
空想へ莫は灰になつてゐる　柳千
空想は社長を助手の心で居　守男
空想にふける今宵の星が冴え　紫水
空想はしばし五月の雲を追ふ　久仁子
空想の机の上へ香を焚き　串二
雛の間に子供揃ふて寢かしたり　川舟
此の雛は今は無き娘の雛でした　伊藤
雛祭り末ッ娘の言ふまゝになり　素峰
年頃をとつくに過ぎた姉の雛　都世路
雛壇に濕氣がぬけぬ赤毛布　柳千
雛祭見せ合ふ子供親淋し　都世路
物言はぬ雛が使節の役を負ひ　吉朗
思出に雛人形の欠けた鼻　久仁子

松坂倶樂部句抄

夜櫻、二日醉、地下室

夜櫻の埃りへ泣いた子が交り　葉留路
夜櫻へやはりそろばんづくで行き　三華
夜櫻へ母は常着でよいと云ふ　からす
夜櫻だけですまぬ約束してしまい　くもを
夜櫻にちよつとのんでるハイヒール　松魚
夜櫻へうれしい肩をならべて來　美根子
夜櫻が故鄕の母を疲れさせ　久米雄
夜櫻もよいがと足はぽんと町　耕二
夜櫻で思ひ出せない人に逢ひ　路郎
何もかも皆地下室にほうりこみ　くもを
地下室で醉つて地球の上に出る　同
二日醉算盤などは煩はし　葉留路
小使にからかはれてる二日醉　久米雄
掃除婦の話地下室響くなり　同
迎へ酒だと二日醉こりもせず　耕二
お禮がつらいと二日醉先手うち　松魚
地下室で夫の好きなハムへ立ち　路郎

有恒川柳會（大阪）

寺井銳々報

人だかり　店仕舞　雜吟　腕時計

人だかり覗いて見れば何もなし　平三

人だかり捨子の親もその中に　三笑
むらがりへ遲ればせながら問ひたゞし　しげる
ほつとした顏で散り行く人だかり　帛堂
子も親の肩から覗く人だかり　同
人だかりタクシー川へはまつてる　乃武路
人だかりしやがんで覗く術もあり　波夢造
唸り聲聞んで見るは獨樂屋也　同
馳けつけた頃人だかり疎ら也　銳々
人だかり後ろ勝手なことを云ひ　同
人だかり交番のおじぎ見てるだけ　同
人だかり下の杭打まじめ也　三笑
札を見て店仕舞かと念を押し　錦浦
店仕舞新規差荷で儲けてる　楳宿
店仕舞にしては元氣な賣子達　平三
店仕舞田舍の親に苦の種か　波夢造
發行の商品券に仕舞ひ兼ね　同
行先を書いた立派な店仕舞　しげる
三度目の店仕舞から立直し　銳々
店仕舞損が行く傾で賣ると云ふ　同
店仕舞馴染は後の事も訊き　銳々
庭の石さへなつかしむ宵があり　同
女自身眞白い指を見る日向　奈良行遊
本堂は黑く暗いと極つたり　楳宿
大佛のお肩の塵も一千年　同
寄るな鹿逃げて廻るもキモノゆへ　波夢造
エスカレーター一人一人の澄し樣　同
パーマネントは厚味に切つた肉を買ひ　しげる
宴席へ三助時計持つて來る　乃武路
二三分づゝ違ふハイクの腕時計　跳二
腕時計ソッと覗いて眼で合圖　三笑
腕時計心の針も正確に　錦浦
湯に入つて始めて氣づく腕時計　楳宿
腕時計見る度毎に止つてる　同
腕時計時間を見るが爲でなし　帛堂
カウスはダイヤ白金の指輪腕時計　銳々
腕時計見る表情と共に立ち　波夢造
なくもがな羽織袴の腕時計　同
腕時計の紐取替へる病上り　路郎
人だかり内の丁稚も混つてる　同
人だかりバケツが來ると道を明け　同
店仕舞儲けることに拔け目なし　同
腕時計どうせ新聞電車なり　同

阪大川柳句會（大阪）

丸島利生報

金歯、目薬、雑吟

思出に彼女の金歯光るなり　利生
お神樂のやうに金歯がならんでる　君女
値段だけ問ふて金冠見合せる　栞
モナ、リザの微笑みの心算金歯出る　正甫
着飾つて行けば金冠高くつき　路生
ツベコベとしやべる金歯の憎さ　同
浪花節でも唄ひさうな金歯なり　春巣
金歯から話は金の値に及び　川女
質草にならぬ金歯が光つてゐ　柳秀
年頃の慾は金歯のことに觸れ　芳一
馴染から金歯の金を拂はせる　利生
火葬場の金歯を想ふほどつまり　栞
不始末へ眼薬ほどの手切金　方正
目薬の涙と見えぬスクリーン　君女
目薬へ顔面筋がみな動き　利生
目薬へ子供の瞼固いこと　栞
しゆまないと云ふ目薬に泣き出され　柳秀
目薬が鼻に流れてあゝちめた　路生
裏口でさす目薬はあはれなり　同
目薬をさして明さが目に泌みる　春巣
子の讀める目薬汽車の窓から見付け　たけを
老博士大學目薬といふお顔　利生
目薬の効目博士の名を並らべ　たけを
廻診はベットの櫻ほめて出る　同
これしきの櫻で踊る大阪人　同
長期戰で外交員はやつて來る　同
やめるのを見越した異動とも知らず　利生
二階借かためてめくるカレンダー　柳秀
むつつりとしてる叔父貴角行に似る　路生
書見れば空家のやうなカフエーなる　栞
巣立して駒場で富士を見る雲雀　香附子
二階借桂馬の如く待機する　路生
人間の食慾に櫻あきれたり　春巣
どうにでもなる怖しい心でゐ　方正
歩であしらはれてゐるやうな頼りなさ　路生
卒業のあるにまかせた使ひ振り　柳秀
植木市妻も一鉢見つけ出し　利生
往診日部屋の飾りを見て座はり　たけを
一杯の酒にその部屋狹くなり　方正
だらしないおもちやの部屋も又嬉し　正甫
あけないと云ふ約束に化粧部屋　柳秀
タイピスト部屋の隅から打ち出しぬ　栞
本ばかり並べて博士狹くゐる　青一路
誰が寢るのか眞ッ赤な夜具が敷かれてゐ　方正
淋しさは部屋へ下るを待つ身なる　同
女中部屋足袋と腰巻入り亂れ　香附子
あの部屋は特約濟ときつう云ひ　同
尺八が轉んでるのも書生部屋　利生
女中部屋に居たろふと圖星さされてる　同
部屋にまだ二人が居つた驚きやう　栞
社長部屋葉巻の匂ひまだ殘り　同
女中部屋びんつけ臭い風が吹き　路生
部屋付きの女標準語を使ひ　同
一人來て部屋の空氣が輕くなり　利生
それからは書生の部屋へ足しげく　同
一部屋を別に欲しがる頃となり　香附子
あつちの部屋だと頸しやくられる　路生
インチキな掛地の部屋で待たされて　同
弟の部屋は古本ばかりなり　路郎

わきが
家庭療治

腋臭でお困りの方は大阪市住吉區アベノ筋四丁目八五、大橋登久方へハガキで川柳雜誌で見たと記名の上御申込みになれば無料で試藥を御送り致します。

暑中見舞の募集を告廣

★一口　壹圓（幾口でも）
★一頁　は　三十口
★締切　七月十五日
★宛　は
大阪市西成區玉出本通三丁目三六
川柳雜誌社（振替大阪七五〇五〇番）
★切手代用可
★なるべく振替を御利用下さい
★どうかよろしく

「川柳雜誌」創刊拾五周年記念

懸賞川柳を募る!!

本誌創刊十五周年を自祝する意味で、懸賞川柳を募集することにした。奮つて應募されんことを切望する。

課題　洋裝（婦人の洋裝に限る）

選者　麻生路郎先生

賞　天金拾圓（一名）
地金五圓（一名）
人金參圓（一名）

五客十秀（記念品呈上）
婦人背廣一着（白ピツケ地　仮縫付別誂仕立）
フジンフクノイエ・プールブー寄贈

副賞
・なほ右の副賞は大阪市南區心齋橋一丁目四四の同店ウキンドーのマネキンに着せて五月廿五日より陳列されてある。御覽を乞ふ。
・副賞は路郎先生の選の天地人五客十秀中より更にプールブー主人が洋裝の立場から秀吟一句を推すことにした。

天位必ずしも彼女への贈物が當選するに限らないところに興味がつながれてゐる。二重の當選をかち得る幸運の作家は果して誰？？？
・剽窃燒直しには賞金を呈しないことゝした。
・應募句が續々と机上に山積しつゝあるのを見ても、この興味ある懸賞方法が如何に人氣を呼んでゐるかが想像される。締切を特に七月十五日迄延期して應募作家の佳吟を期待することとした。

用紙と句數　川・雜投句箋又は官製ハガキ一枚一句（但一人にて幾枚投ずるも可）

締切　昭和十三年七月十五日限
發表　昭和十三年八月特輯號誌上
投句所　大阪市西區筑前橋電停前　昭和ビル一〇一號室
川柳雜誌事務所
十五周年記念懸賞川柳係宛

投稿規定

▲投句は本社發賣の投句用箋、官製葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▲「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る。

▲「川柳塔」への投句は川柳人協會役員及不朽洞會員に限る。

▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事

▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。

▲書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記の事

▲締切は嚴守されたし。

▲投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

募集

第十五卷 第八號課題
六月廿五日締切
（十句以內）

記者　大島濤明選
愛人　水谷鮎美選

第十五卷 第九號課題
七月廿五日締切
（十句以內）

山　麻生葭乃選
海　須崎豆秋選

毎號募集

近作柳樽（雜吟廿句）麻生路郎選
各地柳壇（會報）
文章（評論研究感想吟行漫文漫畫）

★★★★★ 記後 ★★★★★

▼前號は各位の御後援でハッラッとした創刊十五周年記念特輯號を刊行することが出來、贊辭山積に社員一同感激し一日の休養もなく引續き本號の編輯に沒頭して定日發行を斷行することにした。勢ひ原稿の乘り遲れた方々は不悪お宥しを乞ふ。

▼コレで定日發行の軌道に乘ったので順風に帆を張った心地だ七月號もこの調子でグン〳〵押しすゝむことにしたので、寄稿投句共に足並をそろへて頂きたい。

▼「川柳街雜筆」の原稿が氾濫して載せきれない。長いものは次號へ廻はすことにした。御諒承ありたい。本號へは鳥山一歩氏の「活火山の偉觀」、長野文庫氏の「大乘川柳」、畑田よし江氏の「父炭軍を懷ふ」、山本葉光氏の「的確な照準」を揭げた。

▼抽稿の「評釋百句」は大變評判がよいのでうれしい。あと一回で百句になると思ふ。これが終了したら更に目新らしい評釋をやって見たいと思ってゐる。

▼「川柳移動座談會」は一回休載次號まで興味を繫ぐことゝした

▼句會の方も幹事諸君のお骨折りで、日を早めることが出來たもう七月の句會について案をめぐらしてゐる始末だ。

▼本社主催の懸賞募集は二重の當選が興味をよび、投句が續々と集まりつゝある。まだ投句せぬ方は至急應募されたい。

▼近ごろの事務室は千客萬來皆來ると困まる也の賑やかさだ竹中君なんか椅子がたくて立たされる始末、アト札のない方は入れ代りといふ寄席の言葉が思ひ出されてうれしい。遠慮は流行らぬ時節、廊下へハミ出るほど來てもらひたい。（路郎生）

社關係の人々（いろはゝ順）

主幹
麻生路郎

贊助員
池澤樂居
長谷川一雄
大道弘徹
岡本一平
長岡半太郎
長野晴濱
國枝史郎
藤村作
藤本卯之助
田村孝之介
長田退藏
小崎素文
中柳秀敏郎
二純
嘉納
赤井清司
淺田一
末弘巖太郎
大谷五花村
大西長三郎
川村花菱
米村あん馬

客員
伊藤彥造
鳥山一歩
沖野岩三郎
大島濤明
篠原春雨
柴谷宰二郎
前田五健
前田雀郎
安川久留美
窪田銀波樓
高尾亮雄
生方敏郎
谷脇素文
高橋かほる
福田山雨樓
西田艸樂
永田里十九
奥村丹路
★
岩崎柳路
北山悟郎
水谷鮎美
姫田夕鐘
村松夢裡
吉田水車
市塲沒食子
妹尾變人
西八歩
後藤骨兒
宮岡白峰
石曾根民郎
中西おさむ
原史風
江戸みつる
近藤ライト勇
鳥生古弗
正本水客
黒川紫香
丸尾潮花
大坂形水
金田並木
松下小柳子
西いわを
亀井晟修
川上三太郎
小林不涙人
森東魚
須崎豆秋
元紀太
春

不朽洞會員
橋本綠雨

支部と幹事

道頓堀支部（大阪市）
九三會支部（大阪市）
函館支部（函館市）
高知支部（高知市）
梅田支部（大阪市）
田邊支部（和歌山）
籔川支部（島根縣）
鳥取支部（鳥取市）
松山支部（松山市）
御旅支部（大阪市）
天王寺支部（大阪市）
鶴町支部（大阪市）
御池橋支部（大阪市）
松江支部（松江市）
大鐵局支部（大阪市）
西條支部（愛媛縣）
今里支部（大阪市）
今治支部（今治市）
光笑會（大阪市）
竹原支部（廣島縣）
十三支部（大阪市）
臺中支部（臺灣）
兵庫支部（神戸市）
廣島支部（廣島市）
名古屋支部（名古屋市）
岡町支部（豐中市）
下關支部（下關市）
庄萬よし
北山悟郎
亀井晟修
國澤春水
水谷鮎美
辻左馬
尼綠之助
中島鐵州
酒井大棲
江戸みつる
妹尾變人
宮岡白峰
西いわを
勝谷山川兒
正本水客
荒井英賀夫
市塲沒食子
渡邊曉童
永田里十九
松井可笑
淺野牧人
宮内耕期
三崎陽幸
福岡葉留路
吉田水車
丸尾潮花
多田市他樓

定價

一部　金三十錢
半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢
一箇年前金（特輯號共）三圓六十錢

廣告料

本誌への廣告に就いては事務所へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます。

○御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實です○誌代受領は送本によって御承知願ひます御註文には何月號よりと御指示願ひます○轉居又は改號等の節は寄新併記の事

昭和十三年六月一〇日印刷
昭和十三年六月十五日發行

第十五卷　第六號
（毎月一回十五日發行）

大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地
編輯兼發行印刷人　麻生幸二郎

大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地
發行所　川柳雜誌社
電話天下茶屋二五七九番
振替大阪七五〇五〇番

大阪市西區江戸堀（筑前橋電停前）
昭和ビル二〇一室
電話土佐堀三三三三・八一六三・八一六四
事務所

東京市蒲田町女塚町二丁目二二ノ一
川柳雜誌社東京支社
支社

禁無斷轉載

寶捌書店

（大阪）大寶捌大寶書店　參文社　明文堂　朝日ビル書店
其他市内各書店（東京）東京堂（だん）巖松堂（やう）吉岡書店
玉森堂（あまん）紀伊國屋（ぎん）三昧堂（神戸）米田寶文館（函館）
石塚（京都）三宅（名古屋）靜觀堂

十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回十五日發行）
十三年六月十日押刷納本　昭和十三年六月十五日發行

川柳雑誌　NO・173　定價金30錢　送料壹錢

ニキビ

にきびとり

美顔水

吹出物にゼヒ此薬を

ニキビ吹出物に非常によく効きますので大評判の薬です。ゼヒお勵めしたい薬！

美容薬としても

この薬は美容薬としても大へんよく入浴後や洗面後等にお用ひになるととても爽快で、ニキビ吹出物を防ぐのは勿論、キメが細かにツヤを増しお顔がスッキリと美しくなるので美容薬としても盛んに愛用せられてゐます。

蚤蚊南京虫其の他毒虫てカユイ時にもとても便利な薬！

アブラ顔のお化粧下に最適！

化粧用美顔水